

仏 縁

——よき人との出会い——

藤 本 愛 吉

こんにちは。あ、ありがとう。返事してくれましたね。今、「コミュニケーション能力」と学長先生がおっしゃったですね。これは、今のようなことなんです。私が「こんにちは」と言ったら「こんにちは」と返してくれるでしょ。それで私は満足して帰れるんですよ。みなさん大変な勉強ですけども、私はこれでもう充分なんです。呼べば応える関係の大切さと、呼んでも応えないことの問題を今日は語れたらいいなと思っています。私は四年前に脳出血で倒れたもんですから右半身が麻痺してまして、もうひとつしつかりしゃべれなくてすみませんけど、よろしく願います。

昨年もこの時期にお邪魔したんですけど、私がこういう衣を着て、宗教といえますか、親鸞聖人の教えを学んで、お念仏の教えを生涯自分の大事なこととしたいなと思つたのは、ちゃんと理由があるんです。私は農家に生まれました。七人兄弟きょうだいの六番目です。小さい頃は貧乏でした。大変でした。父は建築現場の土木作業に行き、母はその飯場の炊事婦をやり、兄もそこで働きながら僕たちを育ててくれました。そういう時代の中で、私は私なりに夢がありました。みなさんも夢があるでしょ。私には三つありました。一つ一つチャレンジしてきました。挫折もしてきました。家が貧乏だったこともあって一番初めに強く挑戦したのは野球でした。上手かったんです。プロ野球の選手になりたいと思って努力しましたが夢に終わりました。残念でした。踵を上げてずっと通学しましたし、お風呂の中では手首を強くするために何百回もバースと振ったりね、それこそ気が付いたことをやってみました。それで自分の夢を果たそうと思つて、お金を儲けて家族のみんなを楽にさせたいなあとかね、幼心に夢がありました。

それからとても素敵なお先生に出会って、小学校の時にね、自分も学校の先生になり

仏縁

たいという夢がありました。それは十八歳の時に挫折しましてね、大学に落ちたんです。高校に行くのも父は反対でした。もう十五歳だから自分一人で歩けと、そう言われて、頭を下げて行かせてもらって、高校を出て、大学へ行って先生になろうと思っただのも全部落ちました。それで社会人になりました。それでも先生になりたい夢が忘れられずに、東京のほうの通信教育で教員の資格が取れるところに行きました。それで四年間友達に恵まれてね、私は無事に資格を取って無事に卒業することができました。愛知県の豊田市の小学校の産休の先生の替わりに十年行かせて頂きました。その東京に行った時に出会ったのが、みなさんもこれからいろんな人に出会おうと思いますけど、私はそれが自分の人生の中で決定的なことだった。そこでこういう人に出会ったんですよ。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」と念仏を称える人に出会ったんです。

私は宗教というのは大嫌いでした。何か怪しい。ところが、その先生を見た瞬間に感動したんですよ。その方もちょうど今の私と同じ六十歳くらいでした。実際に小さかったのにすごく大きく見えました。足が地について、しっかりした方に見えまし

た。こんな人が世の中におるのかというぐらい感動しました。パッと見て私は感動して、その人に近づくのが恐くなった。その時に会った先生が今もこの私に息づいています。そういう出会いです。「よき人」と言いましたが、私にとっては私の人生を決定するような出会いでした。みなさんもここでね、本当に大事な青春時代を生きる時に、ここで私は人生の土台を作るんだと、人生の一つの方向をもらうんだというふうになれたらいいなと思うんです。

十六歳の女子高生が、もうだいぶ前ですけれども、こんな文を書いています。

なんのために強く生きるの

私は今、ある高校に通う女子高生です。先日、私の友人が、飛び降り自殺をしました。突然の悲報に、私は目の前が真っ暗になり、どうしてこんなことになったのかと泣かずにはいられませんでした。

学校の先生は「死んではいけない。生きなければいけない」と言われます。ま

仏縁

た、世の識者たちも「強く生きねばならない」と、死に急ぐ若者に警告しています。

けれども、だれひとりとして、「では何のために強く生きなければならないのか」この問いに答えてくれる人はいません。

死ねば親が悲しむではないのかと老人たちは論じます。もちろん親不孝であつてはならないことは分かります。でも、本当の生きる意味が分からなくては明るい人生がないし、自殺するなど言われても、本当に苦しい人は自殺すると思いません。

友人が死んだ後、私は太宰治『人間失格』を読みました。その中で、「生まれてきてすみません。もはや私は、完全に人間ではなくなりました。」と書き残し、太宰も入水自殺しています。

人間に生まれて生きる目的も知らず、ただ名誉や利益だけを追い求める人生であつていいのでしょうか。現代人は、何か一番大切なものを知らないのでは……。だれか教えてください。本当の人生の目的を……。

(一九八六年五月二五日朝日新聞掲載)
東京都〇〇〇〇〇〇 (高校生 十六歳)

その文を私の学校にイタリアから宗教学の授業に来ていた先生が課題に出しました。「みなさんは宗教の学校に来て人生の大事なことを学ばれています。今、この子はこういう叫びを上げています。友だちがなくなつて、そうして人生を考えたら、私にとつて一番大事なことは何かというと、こうやって命を頂いた人生の目的を、誰か本当の人生の目的を教えてくださいということだと書いてありました。みなさんこれに応えてください。」これがレポートでした。課題の紙一枚に予め問題が出ていました、僕たちも先生の言葉を受けて、その子に何が書けるだろうか。そうしてみたら、私たちは案外、自分の人生の目的ってはっきりしない。だけど私はたまたまはっきりしてた。つまり、東京で出会ったあの念仏者の姿がとつても心に残つた。蓮如さんも憧れる人をもつたらいいですねと書かれていますけど(「前々住上人、仰せられ候。「信決定の人をみて、あのごとくならでは、と、思えば、なるぞ」と、仰せられ

仏縁

候。(略)『蓮如上人御一代記聞書』、みなさんの中に、自分の中に憧れの人を持っていますか、ということです。それが希望なんです。それが、なかなか憧れる人がコロコロ変わっちゃうんです。私は変わらなかつた。本当にみなさんにもその人に会ってもらいたかつた。そしたらね、ああ、こんな人おるんだなあと、きつと感じられ、胸の底からぐーっと大事なものを見させてもらったということが、自分の人生の方向を決めてくれることになると思います。私はそういう意味で、その女の子に出した自分のレポートは、一言でした。私たちは人間だけでも、もう一つ深く目覚めて、人間として本当の實りを(秋になるとものが実りますけれども、人間としての實りを得てそれを仏さま、ブツダと言つてね、目覚めた人のことを言いますけれども)目覚めていくという大切なことがあるんですよ、と。それがこの学校の一番の元になっていると、私は今聞きました。つまり、人として本当のことに目覚めていくということです。そしたら、みなさんがここにおることが本当になると思います。ここにいて、大事な時間を、おうちの方から支援してもらつて、それで人生の土台を作るこの場で、自分の生きる方向をきちんと見定めていける、そういう人生を学ぶんだと。今、自分

の子どもも大学の三年生で哲学をやってますけれども、それしかないと思います。それから京都のほうで児童館を手伝ってるまん中の娘も、それしかありません。京都の保育所で二年間おって、辞めて結婚して、浜松に七ヶ月の子どもと悪戦苦闘してますけど、その子に対する願ひも一緒です。人生という大事な場をもらって、私という賜った命を頂いてやることは、どうぞ、命が命として満足していく、本当の願ひに目覚めて、人生を全うしてほしいなと私は思うんですよ。みなさんどうですか。今ここにおることが、自分を自分として生きることを学ぶ場になっていきますかね。

これは面白かったというか、心を揺さぶられました。だいぶ前にアフガン戦争があった時に、あるボランティアの看護婦さんが一生懸命仕事をして、義足を作る仕事を覚えた。それでアフガンの悲しい戦争で身体の不自由になった子どもたちの義足を作ってあげたいと思ってね、ボランティアで参加してアフガンに行って、そしてたくさんの、病気になるって、怪我になった子たちを手当てして義足を作っている時にね、ある時、十いくつかの女の子が目の前に立った。片足がなかった。ところが、その女の

仏縁

子の義足を測ろうと思ったらね、その女の子がじーっとしとる。何しとるかなってその看護婦さんは「何なの？」って聞いたたら、その女の子は義足をなおして欲しいだけじゃなかったんですね。びっくりした。私もテレビ見とってね、思わず泣いちゃった。その看護婦さんが使ってるペンが欲しいっていうんです。「私はそのペンが欲しい」って言った。それで看護婦さんはわんわん泣いて帰って来た。なぜかというところ、みんな足がなくて足を作ったら喜ぶだろうと思ったら、もっと切実な願いがその子の中にあつたと言うんですよ。それが何かといったら、「ペンで学びたい」と。そういう女の子に出会ってね、私は何もわかっていなかった、その子をわかっていなかったと。それで、帰ってきてから、また深く勉強をしていかれたんですね。私はそれをテレビで見ている、その女の子、今はとにかく足がなくて辛いけど、そのペンが欲しいって言った子がね、実はここにいるみなさんと同じ心なんですよ。学びたい、私は学びたいと。そういうことを私はその女の子からはとばしるような声ね、「ペンが欲しい」と。私たちは何気なくペンを持っています。今もペンを持ってみなさんがおることが見えています。だけどね、その子のように、ペンを持ちたくて仕方がない、学び

たくて仕方がないところまで私がいくかというところ、私たちはもうこういう生活に慣れている、こうやってね。でも、なかなかその子のように新鮮な形で、「ああ、学びたい」「お姉さんの持つとるペンが欲しい」、そういうことはないですね。日常生活の中でどっぷり浸かると、大事なものも見えなくなっちゃうということを少し教えられたんです。

私はその念仏者に出会った時に、今まで出会った何千人の人たちとは違う、立つとるだけで、座つとるだけで、歩くだけで、またしゃべる言葉が、私には深く、命の深いところから先生が私のような一人ひとりの人間に静かに語りかけられているように、その全体に感動した。そういう心に私は初めて出会ったんです。それで、今もその道を歩いています。その方に会ってから十年くらい経た三十六歳のとき、十年間ほど豊田の小学校の先生をやったんですが、自分の中にこんな思いがあったんです。学校の先生をやりながら生活はできる、お金ももらえる、子どもたちも保護者の方も同僚の先生も大事にしてくれる。それでも私は満足できなかった。なぜかというところ、その先生の念仏のところにある「確かさ」です。その「確かさ」が私にはない。ない

仏縁

どころか、どうも自分の中に危ないものがいっぱい見えてくる。いつまでも命があると思ったり、子どもたちの中で私が振る舞う時に、大人で体力もありましたから、ついつい子どもだとなめてかかったりしてね、偉そうな態度、知ったかぶりが出てくるんですよ。そういうことがチラチラと見えだした。それで、これでは子どもにも申し訳ないと。そのままずっとやっていっても給料はもらえるけど、何か心が落ち着かない。それで思い切って京都の親鸞聖人の教えを学ぶ学校に行っただけです。そこで一から勉強させられました。よかった。どうしてよかったか。その東京で出会った先生と同じような、深い確かな先生に出会った。その先生の元で勉強ができた。だから、私はある意味でよかったなと思ってるんですけどね。

一生の間に、自分をかけていける、信頼して尊敬していける先生を持ったたら、もうそれで、仏道、仏教の教えを学ぶことは半分成就したもんだと、そういうことを安田理深という先生が言っておられます。「よき師を賜れば仏道は半分成就する」と。つまり人間としての目覚めは半分成就したようなもんですと書いてある。そうでしょう。みなさんにとっても何か本当に素晴らしい人に出会ったら、そこに行きたくてし

ようがないでしょ。そして教えてもらいたくてもうがないでしょ。私にはそういうことが起きた。

それで京都に行つてまた素晴らしい先生に出会った。そこでは何をやっとなるかといふと、初めにね、みなさん学校の校歌を歌われましたけどね、私のほうでもちゃんと初めに宣誓というものがあるんですよ。必ず宣誓してね。全寮制です。しかも部屋は二人以上です。一部屋二人から四人以上なんです。個人部屋なしなんです。それで個人部屋のない生活が仏さんの教えを学ぶ最低の条件というのか、そういうことを言われたんです。全寮制を作つて、共同生活の中で学ばなきゃ駄目だ、それでないと仏道は学べないとおっしゃったのが、信国淳という先生です。その方がそういう学校を開いてくださつて、私もそこへ行きました。私は二十八歳で学校の先生をはじめた社会人ですから、自分じゃ一人前と思つていました。だから、そういうことを聞いた時になめてかかつていました。そんなもん知つとるわ、と。態度大きかったです。今も態度大きいですけどね。

その時に共同生活をする理由がね、今、学長先生がおっしゃったコミュニケーション

仏縁

ンのもっと深いものです。私たちは普通のコミュニケーションでは心が落ち着かないんですよ。どういふところまでいったら落ち着くかと言ったらね、龍樹菩薩という人が「自利利他円満」と、自分も他人も平等に尊敬できて、心から満足できるようなあり方、つまり、心から通じ合うようなあり方が本当ですよと、そういうことを言われた。それをみなさん学んでくださいと言われた。それで一年間で学ぶんですけど、これがなかなかしぶといんです。みなさんも家庭という道場を持つてますけど、修行の場をね。家庭の中で、兄弟とか親とかおばあさんとかおじいさんとかと、心から通じ合っていますか、という問いと同じなんです。それを私は三十六歳で、学校の先生を辞めてからそこへ行つてね、隣の人と自由に心が交流するかと思つたら、なかなか交流しないんですよ。初めはいい。知らない同志だから遠慮し合つて、「ああ、そうですね、愛知県ですか。僕は九州です」「ああ、そうですね。僕は三十六歳で、十八歳くらいで来た人とも一応自由に話せてね。「何が好きですか、ああ野球ですか。僕も一緒です」つてね。で、手を繋ぐことができる。でも一緒に生活してたらそうは上手くいかない。そこが自分を学ぶ時なんです。上手くいった時に自分が学べ

るんじゃないくて、上手くないかない時に、ピンチがチャンスだと。みなさんも友だちができた時に苦労しはるでしょ。私もね、十八歳くらいから同級生で旅行をよくやった。はじめは十人ぐらいで行った。だんだん合う合わないで六人ぐらいになって、最後、僕大好きな友達と二人になった。二人になってずーっと近鉄で沿線をまわった。途中でキレちゃった。ああ、旅行は一人がいいなって。それくらい、人と人が繋がるということとは容易じゃないんですよ。

それで、その先生のところではすごい大事なことを学んだ。これはずーっと約二十何年間、その言葉の中で人生を考えています、私はですね。それは何かというと、「出会い」と「ゆきちがい」という言葉です。その「出会い」と「ゆきちがい」という言葉で、人生のことを大事に考えられますよと教えてもらった。思うと本当にその通りなんです。私はそう思って少し学ばせてもらいました。つまり、傍らにおる友だちと心から話せるか。心からお互いの声を聞いていけるかとなると、一緒におつたらね、だんだん心が窮屈になっていく。その時に、私の学校は仏さんの教えを学ぶところです。そして、さつきも言ったように自分と他人が通じ合って生き合っていくの

仏縁

が本当だよと、そういう学びをするために全寮制で開いているんです。そうすると、上手くいかん時に、先生や友だちとみんなと一緒に話し合って、「どうして窮屈なんだろう」「寮へ帰ってくるのがうっとおしくなった」とかね、次々と素直に言うわけですよ。そうするとみんなが「オレもだ」「僕もだ」「私もだ」って、みんな同じ問題を抱えるんです。それを「ゆきちがい」という言葉で、信国という先生が、人生における問題は「ゆきちがい」と、もう一つ「出会い」と。ちゃんと傍らの人と出会って生きるんだ、言葉も心も通じて生きるんだ、そういう世界があるということを教えてもらった。みなさんも是非、そういう意味で今ここにおられてね、友達がおる、先生がおる、家族がおる、そしていろんな形で関係しておる人がいる、その人間関係の中で、本当は仏さんのほうからはちゃんと「通じ合っていくのが本当だよ」という声はかかっているんです。私もそういうことを教えてもらったので、今お話ししています。その時に「出会い」と「ゆきちがい」という言葉で先生が話されたことを、ちょっとだけ文章を紹介しておきます。みなさんも聞いて、後でどう思われるかね。

「師を求めて」ということですけども、私が自分の生涯を振り返ってみますと、結局師を求めて半生を過ごしたということになっていたようです(半生というと人生の半分ですね、この頃先生は六十歳くらいのことですけれど)。ブーバーの著わした自叙伝風の書物に『出会い』があります。お読みになった方もあるかと思いますが、ブーバーが物心ついた時は、すでにおっ母さんがいなかったと思いますね。いなかったんですね。お父さんとおっ母さんの間が不仲になって、おっ母さんが離婚された。ブーバーを生み落としてまもなくにおっ母さんはお父さんのもとを去ったのではないですかね。そういうことで幼少の頃、ブーバーはおっ母さんはいつか自分のもとに帰ってくるんだと思っていた。ところがある時ふと、三つ年上になる女の子から、「あなたのお母さんは帰って来ないのだよ」とこう言われたというんですね。それがブーバーの幼い魂に深い傷を負わせることになって、そしてその時に、心に深く感銘づけられるものがあつた。

その時のその感銘を、ブーバーは後になって「ゆきちがい」という言葉で言い表すことになるのですが、それは、母と自分がこの世にあって、母と子という深

仏縁

い縁で結ばれているにも関わらず、その母との出会いが成就されなかったことを「ゆきちがい」、一人間と人間との間における出会いの欠如、それを「ゆきちがい」という言葉で領いたわけでしょう。

ブーバーは三十代かな、奥さんをもらい、子どもをもうけて、後にそのおっ母さんに会ったわけですけども、その時に若いころ「ゆきちがい」という言葉で領いたものを思い出して、その言葉がブーバーの内に新しく甦ってきたことを、確か『出会い』の最初のところに、「母」という題で書いていると思います。

そこですね。「ゆきちがい」と「出会い」ということ。そういうことはたんにブーバー一人だけに関係したことではない。単に一個人に関係したことではなくて、人類全体にわたる問題であると言っておるわけです。(『呼応の教育』信國淳)

私はこれを読みましてね、この言葉を話しておられる信国先生が立っておられる場所は、先生は個人ですけど、先生が立っておられるところは人類という立場だと思っただんです。およそ人間というのは「ゆきちがい」ということがあるんだと、でもそれ

は根っこに「出会い」ということがあるんですよとわれとるんです。それを私なりに勉強させてもらって、今は、私たちは生まれついた時から関係を持っていますね。どなたも、お母さんとお父さん抜きにはこの世に生まれてきません。だからみんな関係として存在しておるんですけど、その関係が、私は「愛」という、自分の名前が藤本愛吉ですけど、「愛」ということから、この「ゆきちがい」と「出会い」の勉強をさせてもらいました。自分の名前が愛吉という名前ですけど、これは自分の曾祖父の名前です。曾祖父がとても良い人だったと、それにあやかっけて付けたと。十歳の頃お墓参りに行きましたら、私は今は養子ですが、元の姓は石川。お墓に何と書いてあるか。石川愛吉の墓、「母ちゃん、僕の名前もう彫ってあるね」と言っけて大笑いでしたけど。そして学校へ勤めたら、小学校の子どもたちがあだ名を付けてくれました。一番気に入ったのが、「ミックスゴリラ」、みなさんも感じてるでしょ。ちよつと繋がってる顔立ちです。気に入りましたね。○○さんというクラスの女の子がバス停でお母さんと待っていました。僕が「お、○○さん、さよなら」と言ったら、その子おとなしい子ですから、「先生さよなら…」と言っただですよ。その後お母さんにチラッと

仏縁

言ったんですよ。「お母さん、あれが私たちの担任のミックスゴリラよ」と言ったんです。そしたらお母さんが何て言ったか。「そう。そっくりね〜」って言ったんです。私はこの地上にはそんな動物はいないのになと思っただけど、お母さんのその愛らしい顔に免じて、いいあだ名だなあと思ってます。ミックスゴリラ、一番気に入っています。それから、「ラブラッキー」と、私の名前が「愛」と「吉」ですから、「ラブラッキー」という名もつけてもらいました。朝から「あ、ラブラッキーおはよう！」って言うんです。ま、そういう名前もあって私はやってきたんですけれど、つまりLOVEですね、愛です。愛ということが人と人を通じ合わせていく、心から通じるコミュニケーションのものなんです。愛について「ゆきちがう」ということは、愛が破たんするということです。寮生活で本当によく破たんしました。その時に私たちは破たんするような心を持つとすると教えてもらった。私も寮生活でよく破たんしました。一生懸命よい人であろうと頑張つて友達に声かけるんですけど、よく突っ返されました。突っ返されるとだんだんその人を友達と思えなくなつて、「この人：」とか「このヤツ：」とか、どんどん自分の心が濁っている心だと気付かされるんです。それで

「一緒におれないや」とかぶつぶつ自分で言っ、思わず冷たい自分の心に気がついて、「ああ、いざとなったらひどいことや変なことを思っちゃうんだな」とか、いろいろその共同生活で自分の心を学んだんです。学院に来た十九歳の人が、学内の弁論大会でこんなことを言いました。私も笑ったんですけれど。みなさんもきっとよく知ってる方ですけど、方っていうのおかしいですけど。「ドラえもん」という題材で、三分間でこう言いました。

家族と私

僕の家族は、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お父さん、お姉ちゃんの八人家族で、この中で僕がしゃべるのは、おじいちゃん、お父さん、お姉ちゃんのみです。僕は人を本当に嫌いになると、その人を無視し、無関心になり、しゃべらなくなります。そして僕は裁判所の裁判員のようになり、「あいつは好き、あいつは嫌い、あいつはこうだ、あいつはダメだ」そう

仏縁

言って人を裁いていきます(別に裁判所の方はそうじゃないんですけど、この方はそう思っちゃったんですけど)。ドラえもんの話の中に『独裁者スイッチ』という話があります。この話はジャイアンにいじめられたのび太が、「ジャイアンなんて消えてしまえばいいのに」と言ったのに対して、ドラえもんがのび太に独裁者スイッチを渡します。このスイッチは消そうと願うスイッチを押すとその人が消えてしまうというもので、のび太は一人、二人と消してしまいうちに、自分以外の人間を全て消してしまふのです。当たり前のように存在していたジャイアン、スネ夫、ママ、先生が消えてしまつて、ドラえもんさえも消え、のび太は寂しさのどん底に落ちます。最終的にみんな戻つてきて、独裁者スイッチは独裁者を懲らしめるためのものだったという話です。もしこの独裁者スイッチを自分が持っていたらどうなるだろう。出会った人が思い通りにならなかつたら消してしまふだろう。でも思い通りになる人なんていないので、世の中の全てを消し、僕一人になっていたでしょう。しかも、その消した人が戻つて来なかつたら…。独裁者スイッチを持っていないにせよ、僕のやっていることはそれと同じではない

のか。人を無視し、その存在を消すことは、人を殺していることと同じではないのか。しかし無視していてもその人がそこにいれば、無関心でいてもやはり気にしている。だから僕は家族を無視していられるのだと思う。今では料理も掃除もある程度できるようになっている。しかし、そう育ててくれたのは誰だっただろうか。どんなに嫌いでも認めなくてはならず、どんなに嫌いでも、ありがとう、ごめんなさい、と言わなければならぬ時がある。夏休みに家に帰ったら言いたい。「ただいま」と。

こういう弁論をしました。五月頃の弁論ですから、一学期の生活で、ちゃんと生活の中で、自分の好き嫌いで分けてしまう。善し悪しで分けてしまう自分の心がね、すぐそばにいる人を消すような心を持つているんだということ、この子は十九歳で書かれて、私は本当に敏感な心を持つているなと思ってビックリしたんですね。私たちは普段は自分はそのなりに善い人だと思ってるんですよ。私なんか学校の先生をやりましたから、いつも善い人だと思ってます。だからそういうつもりで自分なりに

仏縁

生きています。ところが善い人でおさまらないようなことが出てくるんです。それが共同生活であり家族の生活なんです。また友人関係とか社会での人間関係で必ず上手くないことがあるんですよ。それが仏さまの教えだと、「そうでしょう」「そうだよ、そのとおりだよ」と、「そういううまくいかない心を持つているからね」って、そういう自分の心に気づいていくことが私の初めの学びでした。

私は、東京の通信教育の大学に行っておる時は会社にいました。通信教育は夏に十日間ほどスクーリングといって学校で直接授業を受けなければいけなかったんです。会社は利益が中心だということで、私は四十日間続けて休むのがイヤだったから、会社の社長に「もう辞めます」と。「僕、四十日も続けて休んで会社の人に迷惑をかけますので辞めます」と言ったら、その会社の社長さんが「そんなに勉強して大学に行きたいんなら、君の志が続けられるところを探してあげよう」と言ってね、変則勤務の町の施設の勤労青少年ホームという所に入ることができました。昼から夜九時までの勤務でした。近くの会社で働いている十八歳から二十歳くらいの女の子たちが五時頃からお茶やお花や書道や、料理を学びに来て遊んだりしてました。その後、

私は三十六歳で京都へ来て、ある先生の薦めで得度をしてお坊さんになって結婚をすることにしました。お見合いをして、結婚する時に、青少年ホームに来ていた会社の女の子たちが、豊田市の会社の人と結婚しておったんですね。それで私が結婚することになった時に、(私は愛ちゃんというあだ名で呼ばれていました)。「愛ちゃん、私たちが結婚祝いやってあげるよ」と。で、大勢集まっていました。赤ちゃんを抱えている人もいてね。「愛ちゃん、おめでとう。よかったね」と言ってくれました。心から祝ってくれて、私も素直に「ありがとう」と言いました。「愛ちゃんもついにお婚さんとしてお嫁に行くんだね。頑張ってたね」司会の方に言われてね。「愛ちゃん、はなむけの言葉を言わなくっちゃね」と言ったんです。「うん、ありがとう」。当然私はその子たちにはよい職員と思われていると思っていました。そしたら司会者の人が、「愛ちゃん、私たち愛ちゃんといっぱい旅行に行つたよ。秋には信濃に旅行、御嶽山のスケート場、新潟県のスキー場、夏はキャンプ…、愛ちゃんといっぱいやってきて嬉しかった」っていうんですよ。「そーお？」そしたら、「だけど愛ちゃんね、長野に旅行に行った時、旅館で愛ちゃん、私たちの部屋も全部一人で部屋割りし

仏縁

て、ちゃんと明日の手配もして、見事なほど私たちを心配してリードしてくれたよね。とても嬉しかった。」それで私は、そうだろう、そうだろう、と嬉しそうに鼻がだんだん高くなって、ああ、だからこの子たちは私をお祝いしてくれるんだと思ったらね、「だけど愛ちゃん…」ってクスクス笑い出すんです。「あの時、旅館で火事があったでしょ。」「ん？、知らんよ」その子はしっかりしてますから、「人間って、自分の嫌なことは全部忘れるようにできてるのね。愛ちゃん火事があったでしょ」って、みんな、うんうんって頷いてる。「いや、本当に申し訳ない。知らない…」そして、「あの時、愛ちゃん、火事があった時、大きな声で「火事だ〜！逃げろ〜！」って言ったんよ。野球部だったこともあって大きな声だったわね。で、みんな助かったね、よかったなあと思ってるよ。」「うん」やっぱり僕はいい人ですよ。やったあと思ってる。なるほどそういうことを僕に言いたかったのかと思ってる、それで僕も有頂天になっているところへ、話を進めていかれてね、「だけど愛ちゃん、あの時ね、「火事だ〜！逃げろ〜！」って言ったの、どこで言ったか知ってる？」「は？どこで言ったの？」「愛ちゃんはね、「火事だ〜！逃げろ〜！」と言ったの、私たちだけ置いていて

自分だけちゃっかりと旅館の庭の外に出て、安全地帯から大きな声で外からしゃべったのよ。愛ちゃん、覚えてる？」「ううん」「愛ちゃんは、いざという時にエゴイストになるから気をつけりんよ」これがはなむけの言葉だったんです。面白いでしょ。私も聞いた時に、まだ仏さんの教えを真剣に学ぶ前でしたので、そういうエゴ（自己中心）の心は一過性のもんと思っちゃったけど、仏さんの教えを聞いていくとそうじゃなかったんです。その時におとなしい女の人が赤ちゃんを抱えながら来とって、「私も一言言わせてもらっていいかしら」、○○○っていう人でした。「○○○さん、何かあるの」「うん、愛ちゃんあの時、お客さんの履いてる靴で一番良い靴履いて外へ出ていったよ」って。そんなこと私は全然覚えてない。だけど火事だというギリギリの時に、私はポーンと自分を第一にするという根性を持つとることを見せつけられたんですよ。

そういうことがね、学校に行つて仏さんの教えを聞いておつて、私たちはなかなか人と人が繋がらない。繋がらないという時に、繋がらない心を持つとるからそれが私

仏縁

たちを繋がらせないんだよ、ゆきちがいさせるんだよと丁寧に教えてもらって、だんだん今の自分の問題、昔の自分の失態の原因が見えてきたんです。そしたら大分前にラジオで聞いたことを思い出したんです。その方は若いころ、一生懸命大切な教えの伝道に励んだ。奥深い山の中も行った。大事な教えの本を渡し、その教えを伝えななきゃいけないという使命に燃えていた。ところがある時、山の途中で募金とその本を持って歩いていたら、大きな雷がきた。とっさにパッと岩のかげに隠れた。それで雷が過ぎてふつと気が付いてみたら、なんと一番大事な教えの本をほっぽりだして金庫を抱えておったというんです。それを聞いた時に私は「アホだなあ」と。でもよく考えたらね、その人をアホだなあと思ったけど、結局、私たち、私もね、ギリギリ自分を一番愛着している根性があることに気が付いたんです。そうすると、この十九歳の独裁者スイッチを語った人も、私も、この方も、やっぱり何か最後には自分で相手を切ってしまうような心を、切ってしまうような心を持っていることに気が付いたんです。

それで、こういうことが私の場合はずっと続いていくんですよ。それが一番身近な

人とのことでもあるんです。

私の妻ですけど、京都の東本願寺の親鸞聖人の御真影の前で見合いをしたんですよ。東本願寺の御影堂は暗いですよ。あそこで、私の妻は、当時小学校の先生で、二十八歳でした。御影堂で正座してました。綺麗な正座の姿でした。後ろ姿が美しかったです。惚れ惚れするぐらいに綺麗だった。ピーンと。おまけにズボンが、私には地味なズボンに見えた。私は地味な人が好きなんです。そういう根性を持つとるんです。それで「ああ、これは僕にピッタリだ」と思って、それから話をしていくうちに、ああ、そうですか、と結婚までいったんです。その時に○○さんという、私の妻ですけども、いい名前ですよ。愛と○○。でもハートマークがつぶれてるんです。それはだんだん分かってきたんですけど。その○○さんがある時、「愛吉さん、どうして私と結婚したの」と聞いたんですよ。だいたいそういうことを、どうしても共に生きるというときに愛の存在根拠を尋ねますからね。私も素直に「あなたは本堂で会った時に、地味な格好で綺麗な姿勢でおったですよ。それが素敵だなど思ったんですよ。特にズボンがね、とても地味なズボンでもんぺのように見えて、よく三重県から田舎のおば

仏縁

あちゃんたちが履くようなそういうズボンを履かれてきたなあと思って、感動して嬉しかったんだよ」と言ったら急に怒り出してね、「失礼しちゃうわ」って。「あれはあなたのお見合いのために、三重県のデパートで買ったフランス製の〇万円のズボンよ」と言われてね。私は誤解から出発したんです、結婚が。でもその時にふと思ったんです。僕はね、そこにいる〇〇さんと結婚したんじゃないかって、僕の心と結婚したんじゃないかと思ってね。大変なことに気が付いた。いろんな友達がおる時に、その友達が自分に都合がよいか悪いかで友達になろうとか、ならないとか、そういう心を持っていることがふっと〇〇さんの一言で気が付いた。それからはいろんなことが私に見えてきた。つまり、当たり前前のことのように思ってますけど、実は生活でぶつかっていくのは、全部私たちの心が相手を見る時に、自分の心に叶ったか、叶わなかったか、自分の思いに叶うか、叶わないかで動いているんじゃないかと。そういうことが分からされるんです。結婚して改めて、生活が自分を学ぶ場になっていったんです。

子どものことでちよつと言わせてくださいね。みなさんもいろんなこと気づくかも

しれませんけど、こういうお母さんがおったんです。これも全部一緒です。こういうこと書いてます。四十年くらい前の作文です。五年生の子の日記です。

ほくのお母さんの叱り方は、大へんおもしろい叱り方です。ほくには一言もものをいわせないでペラペラペラと二十分間くらいつづけて説教します。まるで「ビルマのたてごと」という映画でみた「キカンジュウ」のようです。ほくはその間、よく聞いているようなかっこうをしています。お母さんは叱ってしまった、いつでも「わかったか?」といいます。ほくは何もわかりませんが、「はい」ということにしています。先生、きょうの日記のことはお母さんに話さないようにしてください。

と書いてありました。これも「ゆきちがい」ですね。その後、この作文を紹介されている東井義雄先生はこう話されています。

仏縁

別の五年生の男の子なんです、この子のお母さんも機関銃が多いので、だんだん家へ帰る楽しみを失っていました。ところがある日、とんで帰りました。その日は、テストの点数が九八点だったからです。今日はきつとほめてくれると彼は思ったのですが、お母さんの口からとんで出てきたことばは、「なぜこんな簡単なところをまちがってしまったの？なぜ、一〇〇点がとれないの？」という言葉でした。その子のがっかりしてしまいました。ところが、次のテストで待望の一〇〇点をとりました。彼はきょうこそ、ととんで帰るなり、「お母さん、お母さん、きょうは一〇〇点だよ」と叫びながら家へとびこみました。お母さんは答案を受けとって見ておられました、「きょうは問題がやさしくてほかの人もみんな一〇〇点だったんでしょ」ということばが返ってきました。その子は、「ぼくは腹がたつて、腹がたつて仕方がないので、紙にローマ字で「バカ、バカ」と書いて壁にはりつけました。お母さんはローマ字が読めないからです。」と書いていました。

こういう文を読むと、これは別に子どもの世界だけじゃないですね。私たちもいつもやっとなるんですね。だけどそういうことがこういう作文を通して、ああ、同じ心があるなど、自分の都合のいい時は「友だちだ」と言うけれども、ちょっと都合の悪いことを言われてると「もうイヤ」という感じで引いてしまう自分がおりますね。だけどそこにはちゃんとその子がいるわけです。目の前にいるその子とちゃんと手を繋いでやっつけていけるかということ、学院で勉強させてもらったんです。それで初めて「ゆきちがい」のことは私たちの日頃の心ですよ、その心を仏さまに教えてもらって、そして相手と本当に一つになっていける世界があるんですよ。だけど、直接的にはそういう、へだてる心があるから無理だと言うんです。私もそうでした。つまり、はじめに自分の思いに合うか合わないかの注文があるから。だけど自分の心がこういう心を持っているから、すまんね、と言いながら相手に出ていくと、相手も「私も同じだった」という形でね、お互いの心を、申し訳ないなと言いながら出ていける道があると言われるんです。

この前テレビ見てましたら、皆さんのようにこれから大人になる方には少し酷だと

仏縁

思いますけど、NHKである三組の夫婦が旗を頂いて、「ここで今から〇〇分間話を
 続けてください。もし話が途絶えてしゃべれなくなったら旗を挙げてください」とい
 うことをやってました。そしてたら世代の違うご夫婦が話を始めましてね、みんな五分
 経たないうちに白旗を挙げました。つまり、私たちはいざとなったら、本当に人生を
 共に大切に生きていきたいと思っっている夫婦ですらかなかなか言葉が交わせないとい
 う問題があることを語っておられました。その後、テレビでやっておられたのは、「ご
 夫婦でどういう暮らしをしていますか」と言ったら、ご飯を食べた後、同じ場所にい
 て、ちょっと居間にいる時に私たちはしゃべりませんと。「じゃあ、どうしているん
 ですか。一緒にソファアールにおつて」と言ったら、「私も主人も携帯を持っていますか
 ら、携帯で話をします。」と。「あなた、どうこの頃は」そうすると夫の方が「いや別
 にどうってことないよ」と携帯電話で会話していると言われていました。すぐそばに
 おるのに直接話ができないと言われておりました。私はそういうことを聞くにつけ
 て、さつき学長先生がコミュニケーションの大切さを言われましたけどね、言葉が通
 じると、通じないということは人間の一番の根本の問題なんです。

今、私の娘の七ヶ月の赤ちゃんも、まだ「あー、あー」としか言いませんけど、ちゃんと通じる時の顔は違うんですよ。見事です。お母さんが子どもの方を向いとるということが分かるだけで、子どもはお母さんを忘れて遊べるんです。しかも安心して。それを見まして私ビックリして、「ああ、この子は安心してその場におるわ」と、顔がね。「あー、あー」という言葉で繋がつとるんです。何気ない生活が人を形成していくんですね。ある若いお母さん、二十歳ちよつと過ぎてね。子どもが産まれて一歳くらいでうちに遊びに来た。そしたら、その子どもがね、ベッドの手すり棒に触りながら歩いてくるんです。一歳くらいですから。その時に初めて言葉を覚えたんです。何と言ったか。「もうー、もうー」と言うんです。「この子面白い言葉言うね」って僕が言ったら、その若い奥さんが「ごめんさい、これ私のせいなんです」って言う。「どうしたんですか」って言ったら、「私の夫はいつも動作がゆっくりなんです。だからいつも夫を見ては、「もうー」、「もうー」と言ってたので、この子が初めに覚えた言葉は、「もうー」なんです」って言ってね、だから「もうー」、「もうー」って言つとつたんですね。

仏縁

私たちは知らないうちに人間になっていきますけれども、育っていきますけど、一度どこかで、人間として生きることの本当に大事なことは何か、大事なものを自分の中で忘れていないか。その時に、ぶつかった時に、ゆきちがった時に、何が本当に問題でゆきちがったのかということをや丁寧に教えてもらおうと、人と人との出会いを本当に大事にできるかなと思って今日はやってきたんですよ。つまり、こうやって宗教の講座があつて、宗教がなぜあるかという時に、人生の一番元のところ、これがある先生は「扇子の一点」だと言われるんです。扇子せんすというのは最後の元の一点のところ、扇子の働きをするんだと。だからその一点がなかったら本当の大事な人生がふらふらしちゃうよ、と教えてくれました。みなさんがちょうど今、二十代の初めとか十代でね、その青春のときを生きようとされる時に、本当に大事な時期じゃないかと思えます。その時に自分の生きる道を、きちんとここで丁寧に学ぶことをされたら、私はそれが一生の宝になると思っています。ですから、今、こうして勉強させてもらえることの豊かさを、本当の意味で実現するために先生たち**に**ぶつかつていかれてね、対話されていかれたら、いろんなことをまた教えてもらつて見えてくると思います。

私はたまたまですけれども、よき人、お念仏者に出会って大事な大事なことを学び続けさせてもらっています。

私は映画を見てもすぐ忘れちゃうんですけど、『もののけ姫』を作った宮崎駿という方がこんなことを言っています。

生きるのが、ずいぶん簡単で、生きるやり方だけが問題だという時代がずいぶん続いてきたんです。親も教師も、どうすれば得するとか、どうすれば損するとか、損得だけで論じてきたんですけども、損得だけではなくて、生きること自体にどういう意味があるのか、ということをお問わなければならない時代が来たと思っ
うんですね。

これは宮崎駿さんの言葉です。その後、宮崎さんは、『もののけ姫』から『千と千尋の神隠し』というのを制作していますね。あれについて養老孟司さんと話をされてい

仏縁

る中で、『虫眼とアニ眼』という本でしたかね。その本の中でこういうことを言われています。

『千と千尋の神隠し』は、子どもさんに見てもらいたかった。しかも何回も見て欲しい映画じゃないんです。たった一度で分かってももらいたい映画として作っています。

というようなことをおっしゃった。私はそれを聞いてね、思わず息を潜めて、宮崎さんが何を言うかなと思ったらね、「生きていることを、生まれてきてよかったと、その一言をあの映画でわかって欲しかった。」と、そのようなことを言われていたんですね。

もう二十年くらい前にNHKの中で女性のベテランの保母さんが出ましてね、今の幼稚園の子ども状況、保育園の子ども状況を話しておられました。「子どもの健康のバロメーターは絵です。絵を描かせたら分かります。絵を描かせたら、健康な子ども

は必ず太陽が入ってるんです、どっかに。そしてお母さんが入っている。これが子ども
 の健康さです。ところが、何年も前から、子どもの絵から太陽が黒くなっていっ
 て、最後その太陽が消えていったっていうんです。それからお母さんはどうなったか
 というと、お母さんの顔が書けなくなりました。おまけに顔は後ろ向きになって、最後に
 お母さんの顔は消えた、そういう絵が出てきましたね。」とおっしゃってました。つ
 まり生まれた時からずっと子どもはお母さんと関係を持っているんだけど、その絵か
 らですね、そういう子が育っていく原点がだんだん今は、保育園の保母さんをやっ
 とると、子どもの一番小さい時になくてはならない太陽とか、お母さんの顔とかが消え
 ていく絵が出てきましたね、とおっしゃいました。みなさん、どうですかね。ふっと
 思い出す中に、故郷とか、お母さん、そういう近い人をぐーっと身体に感じるよう
 な生活をされますか。私はそういうことが大事だということを徐々に感じてきまし
 てね。学院に二十五年間、学生さん約二〇〇〇人以上の方と共同生活してきまし
 てね、まあ、時代は変わっても同じ問題をみんな抱えているなと思いました。

今、私は実家の母が九十八歳になります。それがこの前、心臓が弱ってきたという

仏縁

ことを聞いて、私は妻と会いに行きました。兄夫婦も来ていました。最後の見舞いかなと思っていきました。うちの母は小学校三年生しか出ていなくて字もよく書けないんですけれど、その中で生きてきて、久しぶりに会ったらね、両手を出すんです。「待った」って。お前を待ったと。私もようやく「人のいのちは、はかなくもろしとなり」と親鸞聖人がおっしゃった言葉の深さがちよつとだけ見えてきた時だけに、―いつもは私と母とはダメなんですよ、顔を合わせたらぶつかっちゃう心がありますから。ところが、母が「待った」って手を出した時に私も素直に手を握れましてね。そしてもうボロボロになった母の身体の膝をさすらせてもらいました。ゆっくりゆっくり。「大変だったね」って。そういう中でもやっぱりそうやって、命を授かってあるお互いですけど、最後のところでやっぱりまた私たちの心が注文することが出てくるんですよ。そうするとね、私ともぶつかるし、嫁さんともぶつかるし、兄ともぶつかっていくんですが、最後の最後にね、やっぱりそういう悲しみを持つっちゃうんです。ですから是非みなさんも、こういう宗教の時間ですけど、学校全体がね。学長室に行きましたら初めに「真実」と、「真実を大事に」と書いてありました。そ

ういうところをいつも胸に持ちながら人生を歩まれたら、必ずその言葉にしたがって自分の人生が、ちゃんと一つの道が開けると私は思います。今、私はなくなっていくかんとする母を見ましても、母を責める、裁く心が湧いてきます。そういう心がせつかくの大事な関係を壊してしまう心だということを教えてもらって、その心に気が付いた時だけ、「ああ、すまんね」と一言言っただけは生活しとるんです。

こういう場所で仏さんの心を教えてもらっていく中で、一緒に友達がおって、「あ、そこ間違ってるよ」と言われたら、「あ、そうね、ありがとう」と言える、そういう心を大事にしていかれたらきつとね、ああ、この学校に来てよかった、この学校に来て人生の土台をもらった、人生の方向をもらった、と必ずみなさんが言えるような、そういう青春を生きてほしいと思います。青春なんですよ。私が二十四歳の時に出会った先生がね、「人生二度なし」という言葉を教えてくれました。感動がありました。みなさんにもね、是非「人生二度なし」、大切な人生を頂いている中で、一つひとつを丁寧に勉強していかれて、大いに勉強されていかれて、そして自分も他者も大事にしていられるような道を歩かれたらいいなと、私は思っています。是非ね、よ

仏縁

い勉強をしていってください。

みなさんの中にね、本当に友情を深くしていく中でいろんなことあると思いますけど、是非、お互いの本当に願っている心を丁寧に教えてもらって、その心を大事にしていってください。

今日は本当にありがとうございました。

—二〇一一年一〇月二八日—